【水の作文大賞】

「地域の水」

熊本県　八代市立第八中学校　２年　宮﨑（みやざき）　紗良（さら）

宮地には、熊本県の中で最も古い紙漉きの歴史をもつ「宮地和紙」がある。そして、田舎だが、なんと言っても、自然がきれいだ。山に近く、きれいな川や水路が流れている。宮地和紙は、この環境だからこそ行うことができるのだと私は思っている。

小学六年生の三学期、卒業証書をつくるために和紙を自分の手で漉くという体験をした。だが、その日は私を含め、数人が学校を休んだ。そのため、私とその人たちは違う日に矢壁さんという和紙職人の職屋(作業所)まで行った。そこで、卒業証書の和紙を漉かせてもらった。矢壁さんの職屋の中は、とても歴史を感じるような作りだった。そして、紙漉きの道具、材料で職屋の中はあふれていた。それは、私が初めて見るものばかりだった。この体験を振り返って、私は「どうして宮地和紙は、昔から現在まで絶えなく、受け継がれてきたのだろう？なぜ宮地地域にだけあるのだろう？」と疑問に思った。そして、もっと宮地和紙について知りたいと思った。

中一の春、「みやじ学」のコース決めがあった。「みやじ学」とは、宮地校区の小学校と中学校の生徒(小五・小六・中一)が一緒に宮地のことについて学ぶ機会のことだ。私は、宮地和紙について知りたいと思っていたため、「宮地和紙コース」を選択した。夏休み前、「みやじ学」が始まった。まず、フィールドワークに行った。フィールドワークでは、宮地の町の中にある、水路を見て回った。どの水路からもきれいな水が流れていた。しかも、一本ではなく、何本も水路はあった。自分が住んでいる地域のことなので、水路が流れていることは知っていた。だが、何のために流れているのかと不思議に思っていた。フィールドワークでは、水路だけでなく、洗い場や小６の頃に行った、矢壁さんの職屋にも足を運んだ。そして、紙漉きの道具、材料、矢壁さんが漉いた和紙を見せてもらった。小６の頃に来た時は、名前も使い方も分からなかったが、一つ一つ詳しく教えてもらい、なるほど！と思った。やはり、小６の頃と思ったことと同じく、歴史を感じた。今回はそれにプラスして、伝統も感じた。フィールドワークが終わり、学校に帰って学習したことをまとめた。そして、この宮地に紙漉きの伝統があること、紙漉きは美しい川や水路があるからこそできるということ、最後にこの伝統を絶やさせず、これからも受け継いでいかないといけないということを知った。

そのために私は、この宮地の美しい水をこれからも美しいまま残していきたいと思う。宮地の水を守るということは、紙漉きの伝統を守ることにきっと継がると私は考える。地域にそのような伝統がなくとも、地域の水を大切にするということは、地域を大切にすることである。宮地、熊本だけでなく、全国で地域の川や水路を大切にし、日本の伝統を受け継ぎ、世界にアピールしていきたい。